

菊愛好家のコンクール

藤原 道夫

秋が深まる頃、民家の軒先などで大輪の菊の花を見かけると、

菊の香や奈良には古き仏たち 芭蕉

の一句が浮かぶ。今年もそんな季節がやって来た。

近くの神代植物公園では11月に入ると「菊花大会」が開催される。都内および近郊の愛好家が丹精を込めて育てた菊花のコンクールだ。毎年見に行くことにしており、今年も11月上旬に2回出かけた。行く度に日本人の菊花を咲かせる情熱と技能には感心するばかり。

植物公園の正門を入ると菊車が迎えてくれる。公園の職員たちがこの大会を目指して育てた色とりどりの多くの菊花を組み合わせ、古い荷車の上に高さ2mほどのオブジェに仕立ててある。

この菊車を中心に、紫の幕が掛ったいくつかの長い簾の囲いの中に2段に分けて白、黄色や紫の菊の花が展示されている。菊の育て方にはいろいろあるようで、順番に見て行く。

「福助作り」 大菊を小さな鉢（5号）に一輪だけ40cm以下に咲かせる。

「盆養」 1本の茎に3輪の大菊を咲かせる。花のバランスが評価の対象となるよう。

「だるま作り」 大菊を3本仕立てで7号鉢に60cm以下に咲かせる。

「小菊盆栽」 小菊1本を1年半ほどかけ、あたかも古木に花が咲いているように育てられている。形もいろいろ、松の盆栽のように花を付けた鉢や、懸崖作りといって垂れ下がる細長いハート形に多くの花が咲いている鉢もある。作り手の手間暇かけた思い入れに感心し、見入ってしまう。

優美に作り上げた菊花に一位、二位の他、総務大臣、農林水産大臣、都知事、調布市長、深大寺山主などから賞が授けられている。入賞した作りとそうでないのを、知識がないながら見比べるのも楽しみ。

この他「古典菊」といわれる個性的な花を咲かせる品種も展示されている。江戸、嵯峨、伊勢、肥後といった地名の表示が見える。江戸や肥後はそれぞれ特徴ある花菖蒲を作り上げたことで知っていた。

戦争がない江戸時代、武士も町民も余裕ができてこのような園芸文化が華開いたのだ。たかが菊、されど菊。そうだ、奈良を思い出した。そのうち行ってみよう。